Profile

© Kiyotaka Saito (SCOPE)

千住 真理子

Mariko Senju（Violin）

2歳半よりヴァイオリンを始める。全日本学生音楽コンクール小学生の部全国1位。NHK交響楽団と共演し12歳でデビュー。日本音楽コンクールに最年少15歳で優勝、レウカディア賞受賞。パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。慶應義塾大学卒業後、指揮者故ジュゼッペ・シノーポリに認められ、87年ロンドン、88年ローマデビュー。国内外での活躍はもちろん、文化大使派遣演奏家としてブラジル、チリ、ウルグアイ等で演奏会を行う。また、チャリティーコンサート等、社会活動にも関心を寄せている。

1993年文化庁「芸術作品賞」、1994年度村松賞、1995年モービル音楽賞奨励賞各賞受賞。

1999年2月、ニューヨーク・カーネギーホールのウェイル・リサイタルホールにて、ソロ・リサイタルを開き、大成功を収める。

2002年秋、ストラディヴァリウス「デュランティ」との運命的な出会いを果たし、話題となる。2015年はデビュー40周年を迎え、1月にイザイ無伴奏ソナタ全曲「心の叫び」、2月にはバッハ無伴奏ソナタ&パルティータ全曲「平和への祈り」をリリース、両作品ともレコード芸術誌の特選盤に選ばれた。2016年は、300歳の愛器デュランティと共に奏でるアルバム「MARIKO plays MOZART」をリリース。またプラハ交響楽団、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団と各地で共演。2017年はブラームス没後120年記念「ドラマティック・ブラームス」をリリース、また全国でスーク室内オーケストラとツアーを行い、好評を博した。2019年はベートーヴェン生誕250周年に先駆け、ピアニストの横山幸雄と「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集 Vol.1」をリリース。2020年は近年発見されたイザイの未完のソナタを新たに録音し、その楽曲を加えたイザイ無伴奏ソナタ全曲「心の叫び」<完全版>を再リリース。春には「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集　Vol.2」をリリースした。またデビュー45周年を迎え、各地で記念演奏会を行う。

コンサート活動以外にも、講演会やラジオのパーソナリティを務めるなど、多岐に亘り活躍。著書は「聞いて、ヴァイオリンの詩」（時事通信社、文藝春秋社文春文庫）「歌って、ヴァイオリンの詩2」「ヴァイオリニストは音になる」（いずれも時事通信社）「ヴァイオリニスト 20の哲学」（ヤマハミュージックメディア）母との共著「母と娘の協奏曲」（時事通信社）「命の往復書簡 2011～2013」（文藝春秋社）「千住家、母娘の往復書簡」（文藝春秋社文春文庫）など多数。

千住真理子オフィシャル・ホームページ　https://www.marikosenju.com/

Mariko Senju 45th Anniversary Debut

好評発売中

平和への祈り～
バッハ：無伴奏ヴァイオリン全曲
千住真理子

【収録曲】

J.S.バッハ
無伴奏ヴァイオリン・ソナタとパルティータ

1. ソナタ 第1番 ト短調 BWV1001
2. パルティータ 第1番 ロ短調 BWV1002
3. ソナタ 第2番 イ短調 BWV1003
4. パルティータ 第2番 ニ短調 BWV1004
5. ソナタ 第3番 ハ長調 BWV1005
6. パルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006

千住真理子（ヴァイオリン）

録音：2014年9月 草津

SHM-CD仕様　2枚組　UCCY-1049/50　定価¥3,500+税

発売：ユニバーサル ミュージック

千住真理子

デビュー45周年記念 平和への祈り

バッハ無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ全曲演奏会

2020年12月6日（日）15:00 開演
東京オペラシティ コンサートホール

3:00p.m., Sunday, December 6, 2020 at Tokyo Opera City Concert Hall

JAPAN ARTS　【主催】ジャパン・アーツ

© Kiyotaka Saito (SCOPE)

Program

J.S.バッハ <J.S.Bach>：

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番 ト短調 BWV.1001
Violin Sonata No.1 in G Minor BWV.1001

パルティータ第1番 ロ短調 BWV.1002
Violin Partita No.1 in B Minor BWV.1002

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

パルティータ第3番 ホ長調 BWV.1006
Violin Partita No.3 in E Major BWV.1006

ソナタ第3番 ハ長調 BWV.1005
Violin Sonata No.3 in C Major BWV.1005

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ソナタ第2番 イ短調 BWV.1003
Violin Sonata No.2 in A Minor BWV.1003

パルティータ第2番 ニ短調 BWV.1004
Violin Partita No.2 in D Minor BWV.1004

［第2部］の曲順が当初の発表より変更となっております。

バッハは祈り、だ。
バッハの無伴奏作品は特に、神聖なる祈りそのものだ。
全世界に広がる不安な心を、バッハは慰め、癒し、勇気付ける。

私がデビューからの節目となる周年ごとに『バッハ無伴奏全曲演奏会』を行おうと決めたのは
デビュー20周年の時だった。その後は5年ごとに、自分との約束を果たしてきた。
ある時は大震災の復興を願いながら弾いたバッハ、原発事故の終息を祈りつつ弾くバッハ、
または病に苦しむ母の最期が穏やかであるようにとひたすら独りバッハを奏でるステージもあった。
バッハの響きが、空間に放たれた時、全てが祈りに満たされる。

私たちは、平和を祈る。
ただ、穏やかに過ごせることを祈る。
誰もが幸せに満たされることを心に願い、
バッハの響きに優しく包まれる貴方を想い、この日私はバッハを奏でる。

千住真理子

Program Notes

作曲家：柿沼 唯

J.S.バッハ（1685-1750）　無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ

バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ（全6曲）は、ヴァイオリンという楽器が持つ機能を最大限に発揮させ、その表現を高い芸術的境地へと結実させた音楽史上不滅の傑作としてあまりにも名高い。これらは、多数の器楽作品や室内楽の傑作が集中的に生み出されたケーテン宮廷楽長時代（1717-23）に書かれた。バッハは、他の楽器と同様にヴァイオリンの演奏にも優れた腕前をもっていたといわれ、それがこの画期的な作品が生み出される土台となったのは言うまでもない。何より大きな特徴は、ヴァイオリンを対位法的に扱う技法である。こうした技法はバッハ以前にもイタリアやドイツで試みられていたが、このように大きなスケールで書かれた曲はバッハのこの作品をおいて他になく、その書法は当時のヴァイオリンの常識を超えるものだった。

3曲のソナタと3曲のパルティータで構成されるこの作品は、1曲ごとにソナタのあとにパルティータが続く形で配列されている。ソナタはいずれも緩-急-緩-急の教会ソナタの4楽章形式で構成され、その第2楽章はすべてフーガ。一方パルティータのほうは舞曲を中心とした本来の組曲形式によるが、面白いのはその楽章数が〈第1番〉の4から始まって、〈第3番〉の6まで正確に1つずつ増えてゆくことで、ソナタの「静」に対して「動」の役割を託されている。

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番 ト短調 BWV.1001

瞑想的ともいえる第1楽章の荘重な曲想、シチリアーノと題された第3楽章ののどかな曲想に対して、第2、第4楽章は颯爽とした精気溢れる曲想を印象づける効果的な書法で、ヴァイオリンの魅力を引き出す。

第1楽章アダージョは幻想曲の趣きをもつ。
第2楽章「フーガ」（アレグロ）は3声部を主体として爽やかな精気に溢れ、ヴァイオリンの魅力を引き立てる。
第3楽章「シチリアーノ」は、低声部と高声部に感動的な「対話」が聴かれる。
第4楽章プレストは、ジーグ風の急速な音の連なりが華麗に綾をなす。

パルティータ第1番 ロ短調 BWV.1002

組曲形式でもっとも一般的な4種の舞曲で構成されるこのパルティータに特徴的なのは、その4曲すべてに「ドゥーブル」という一種の変奏がつけられていることである。楽節や和声構造はそのままに音型を細かく飾るこのドゥーブルでバッハの興味は、慣用の舞曲の楽想からどれだけの変化を生み出せるか、にあったようだ。

「アルマンドとドゥーブル」はフランス風序曲のような付点リズムの堂々とした歩みで始まる。
「クーラントとドゥーブル」は、ドゥーブルで技巧の閃きを見せる。
「サラバンドとドゥーブル」は、この舞曲本来の重厚な曲想を重音奏法で奏でて始まる。
「テンポ・ディ・ブレーとドゥーブル」は跳ねるようなブレーに続くドゥーブルが闊達に全曲を締めくくる。

パルティータ第3番 ホ長調 BWV.1006

管弦楽組曲風の自由な楽章配置により、無窮動風の「前奏曲」にはじまり軽快な「ジーグ」で終わる、終始明るい曲想に満たされた作品。各曲は、様々な編曲によっても広く親しまれている。

「前奏曲」は一種の無窮動の中に、ハーモニーとリズムの変化が織り込まれ、歓びに満ちた楽想を生み出してゆく。
「ルール」はフランスの田園舞曲で、ゆったりとしたメロディが奏でられる。
「ロンド風ガヴォット」は、大変有名な一曲。輝かしく軽快な調べが心地よい。
「メヌエットI、II」は、かっちりとしたIと柔和なIIが対比される。
「ブレー」は勢いよく始まり、途中エコー効果も挿まれる。
「ジーグ」は明るく楽しげな楽想で、全曲を元気に結ぶ。

ソナタ第3番 ハ長調 BWV.1005

3曲のソナタ中もっとも壮大な規模を誇る一曲。中でもその「フーガ」は特筆すべきものとなっている。これはバッハがオルガンのために書いたフーガにも匹敵しうる大建築で、全354小節という長大さは、バッハが書いた他のどのフーガよりも長い。そして最大5声部におよぶその入念な書法は、ヴァイオリン書法の極致ともいえるものである。

第1楽章アダージョは、単純な付点リズムにはじまるが、声部と響きを増しながらその楽想に生命が与えられてゆく感動的な一曲。

第2楽章「フーガ」は、前述のように長大な楽章。主題は「来たれ、聖霊、主なる神」という古いコラールの旋律から採られている。フーガの様々な技法が駆使され、後半には主題の「転回形」（上下を逆にした形）も現れる。

第3楽章ラルゴでは、優雅なメロディが慰めをもたらす。

第4楽章アレグロ・アッサイは、ヴァイオリンが協奏曲のフィナーレさながらに急速なパッセージを展開して、全曲を閉じる。

ソナタ第2番 イ短調 BWV.1003

前半の二つの楽章は悲劇的な情緒が色濃く、第2楽章の長大で劇的表情に富むフーガはバッハの生前から「驚くべき作品」と注目されていた。一方後半は対照的に、表情豊かな第3楽章と活発な第4楽章で締めくくる。

第1楽章グラーヴェでは、重音を効果的に用いた抑揚のある旋律線が雄弁で劇的なクライマックスを形作る。
第2楽章「フーガ」は劇的表情と内面性をもつ一曲で、特徴的な半音階は「苦悩の動機」とも呼ばれる。
第3楽章アンダンテは、一定のリズムを刻む伴奏の上に絶妙のメロディを歌わせる。
第4楽章アレグロでは、トッカータ風の急速な音型にエコーの効果が巧みに織り込まれる。

パルティータ第2番 ニ短調 BWV.1004

この曲が全6曲中もっとも重要な作品といわれるのは、言うまでもなく最後に置かれた「シャコンヌ」のためである。バッハの全作品中の傑作にも数えられるこの長大な曲は、演奏時間にして前に置かれた4つの舞曲と同じくらいの長さがあり、前4曲はその前奏のようにさえ感じられる。その4曲はバッハが組曲でしばしば用いた「アルマンド」「クーラント」「サラバンド」「ジーグ」の伝統的舞曲。そして最後に「シャコンヌ」がくる。シャコンヌとは古い舞曲のひとつで、その形式は短い低音の和声定型を何度も繰り返しながら、その各々の繰り返しの上に変奏を築き上げていくというもの。バッハは、4小節の定型をもとに、いまだかつてない壮麗・雄大なシャコンヌを作り上げた。主題と30の変奏からなるこの大曲において、ヴァイオリンは、およそ管弦楽にも匹敵するような響きの豊かさと変化を要求される。